



# アンサンブル ディマンシュ

## 第 88 回演奏会

2021 年 2 月 21 日(日)

府中の森芸術劇場 ウィーンホール



### 【プログラム】

モーツァルト 歌劇「魔笛」序曲 K.620

シューベルト 交響曲第3番ニ長調 D200

♪ 休憩 15 分 ♪

ベートーヴェン 交響曲第5番ハ短調「運命」 Op.67



## 【プロフィール】

指揮 平川 範幸



1987年福岡県出身。福岡教育大学音楽科卒業。

上野学園大学研究生〈指揮専門〉にて下野竜也、大河内雅彦の各氏に師事。桐朋学園大学オープンカレッジにて、黒岩英臣氏に師事。また、パーヴォ・ヤルヴィ、沼尻竜典の各氏の指揮講習会を受講。

これまでに、音楽理論を中原達彦氏に、ピアノを田中美江氏に師事。

2012年度、新日鉄住金文化財団指揮研究員として、紀尾井シンフォニエッタ東京の下で活動する。

その後、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員として、宮本文昭、飯守泰次郎の各氏の下で研鑽を積む。

これまでに、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、大阪交響楽団、千葉交響楽団（ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉）、浜松フィルハーモニー管弦楽団、東京混声合唱団などを指揮する。

また、各地のジュニアオーケストラや学生オーケストラ、吹奏楽団、合唱団を指揮する。

2016年度より、仙台ジュニアオーケストラ音楽監督を務める。



## 【曲目紹介】

### ◆モーツァルト：歌劇「魔笛」序曲 K.620 ～モーツァルトの「最後に完成した歌劇」～

歌劇「魔笛」は、モーツァルト(1756-1791)が没年の1791年に作曲した「最後に完成した歌劇」です。普通「最後の歌劇」と言いそうですが、この曲に関してはそう言えない事情があります。モーツァルトは、1791年の3月にこの歌劇を書き始め、9月に書き上げます。その間、8月に一旦中断して、歌劇「皇帝ティートの慈悲」をわずか18日間で書き上げ、9月6日のプラハ初演に間に合わせています。同中旬にプラハから戻ったモーツァルトは、「魔笛」を急いで完成させ、30日の初演に漕ぎつけます。つまり「魔笛」は、「皇帝ティート」より書き始めは早いですが、完成が遅いというねじれ現象が起きているため、「最後の歌劇」と言えるかどうか不明確なのです。モーツァルトの曲を整理し、時系列の番号を付けた音楽学者ケツヘルは、「魔笛」にK.620、「皇帝ティート」にK.621という番号を付け、後者を「最後の歌劇」としています。「魔笛」が、中断された時点でほとんど完成していたということもあるでしょう。

この序曲は、堂々とした短い序奏の後、速い主部に入ると、軽快でおどけた主題が第2ヴァイオリンを筆頭に順に他の弦楽器に現われ、フガート(ちょっとしたフーガ)を形成していきます。この有名な主題のモチーフ、実は、モーツァルトのオリジナルではなく、ピアノ初心者の登龍門「ソナチネ」の作曲者として有名なクレメンティ(1752-1832)のピアノ・ソナタ変ロ長調 op.24-2からの借用です。モーツァルトとクレメンティは、1781年に神聖ローマ帝国皇帝・ヨーゼフ二世に招かれた席で競演しますが、この時クレメンティは前述のピアノ・ソナタを演奏したと言われています。後日モーツァルトはクレメンティを酷評した手紙を父レオポルドに送っていることから、このモチーフの借用はクレメンティへの侮蔑を表しているのではないかと推察されます。あえてこのモチーフを使ったのは、「積年の恨み」でも晴らしたかったのでしょうか。

## ◆シューベルト:交響曲第3番ニ長調 ～シューベルトの「イタリア交響曲」～

シューベルト(1797-1828)は、1815年3月、交響曲第2番を完成させると、その2ヵ月後に第3番に着手し、7月に完成させます。弱冠18歳の年です。この第3番は、「悲劇的」と呼ばれる次の第4番とは対照的に若さ溢れる明るさに満ち、喜劇的、楽天的な曲です。中でも第1楽章と第4楽章はイタリアの香りがしますが、ロッシーニ(1792-1868)の影響を受けていると思われます。特に第1楽章主部の第2主題は、1812年1月に初演されたロッシーニの歌劇「幸福な錯覚(L'inganno felice)」序曲の第2主題によく似ています(あくまで個人的な感想です)。この歌劇は、1816年11月にロッシーニの歌劇として初めてウィーンで公演され、ウィーンにおけるロッシーニ・ブームの火付け役となった曲です。

ただ、シューベルトのこの交響曲がロッシーニの影響を受けていることについては、否定的な意見もあります。その理由は、ロッシーニの歌劇のウィーン初公演(1816)がこの交響曲の作曲時期(1815)よりも後に当たるからです。しかしながら、前述の歌劇がヴェネチアで初演(1812)されたときは大成功で、その後イタリア各地に次々と広まっていき、1815年までの4年間に延べ20都市以上で公演されています。この評判がウィーンのシューベルトに届いていないとは考え難く、あるいは当時師事していたイタリア人の作曲家サリエリ(1750-1825)(モーツァルトの映画でライバルとして登場する人物)から何らかの形で情報を得ていたことは十分に考えられます。

### 第1楽章 Adagio maestoso—Allegro con brio ニ長調 4/4 拍子 ソナタ形式

ロッシーニ風な速い上昇音階を基にした序奏に続き、主部に入るとクラリネットが自作の交響曲「グレイト」に似た弾む第1主題を奏でます。速い上昇音階を基にした経過部の後、ロッシーニの歌劇「幸福の錯覚」序曲に似た第2主題がオーボエによって歌われます。

### 第2楽章 Allegretto ト長調 2/4 拍子 三部形式

シューベルトならではの歌謡風な楽章で、A-B-Aの三部形式になっています。最初の2小節の音の運びが、14世紀ドイツの民謡「マリアの子守歌」と同じなのは偶然でしょうか。中間部はより楽しい旋律をクラリネットが歌います。この旋律は習作の歌曲が基になっているようです。

### 第3楽章 Menuetto, Vivace ニ長調 3/4 拍子 メヌエットとトリオ

三拍目のアクセント(フォルツァート)が特徴的な速いメヌエットとドイツの舞曲レントラー風なトリオです。トリオではオーボエとファゴットが民謡風な旋律をデュエットし、弦楽器がワルツ風な伴奏をします。レントラーはウインナ・ワルツの前身とも言われています。

### 第4楽章 Presto vivace ニ長調 6/8 拍子 ソナタ形式

イタリアの舞曲「タランテラ」風な楽章です。ときどきフレーズ最後の弱拍に出てくるフォルツァートは、イタリアのオペラ・ブッファを思わせます。タランテラはイタリア南部の町タラント発生の速い6/8拍子系の舞曲で、毒蜘蛛の「タランチュラ」も語源は同じです。

## ◆ベートーヴェン:交響曲第5番ハ短調「運命」op.67 ～ベートーヴェンの「革命交響曲」～

ベートーヴェン(1770-1827)は、1804年に交響曲第3番「英雄」を完成させると、第5番「運命」のスケッチを書き始めますが、それを一時中断して1806年には第4番を一気に書き上げます。その後「運命」を本格的に書き始め、1808年初頭に完成させます。従来、次の「田園」と並行して書かれたとされてきましたが、最近の研究で、両者はそれほど作曲時期がダブっていないことが分かっています。初演は1808年12月22日、「田園」と一緒のプログラムで、「田園」が先に第5番として演奏されたため、「運命」は第6番として演奏されています。

この曲では、交響曲史上の「革命」とも言える多くの試みがなされています。①第1楽章は自身が「運命は扉を叩く」と言ったと伝わる四つの音で始まるが、そのモチーフをレングのように緻密に積み重ねて楽章が出来上がっていること。②そのモチーフの変型が各楽章で顔を出し、各楽章間に関連性を持たせていること(循環形式)。③第3楽章と第4楽章は一体となっており、第4楽章の途中で第3楽章の断片が出て回想されること。④第4楽章には3本のトロンボーンのほか、ピッコロやコントラファゴットを用いていること。など、挙げればきりがなく、後の作曲家に与えた影響は計り知れません。

### 第1楽章 Allegro con brio ハ短調 2/4 拍子 ソナタ形式

冒頭、「(ウン)タタタ | ターン」という四つの音を # で叩きつけますが、指揮を振り下ろした時に、三つの音の前の八分休符(ウン)が絶妙な緊張感を生んでいます。この楽章にはメロディらしいメロディはなく、この「運命のモチーフ」の積み重ねによって構成されています。

### 第2楽章 Andante con moto 変イ長調 3/8 拍子 自由な変奏形式

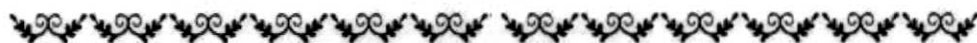
ヴィオラとチェロが優雅だがリズムミクな旋律を歌い出します。主題後半ではゆったりとした「運命のモチーフ」が出てきます。この主題は自由に変奏されていきます。

### 第3楽章 Allegro ハ短調 3/4 拍子 スケルツォとトリオ

「運命のモチーフ」に由来している「スケルツォ」とベルリオーズが「象のダンス」と呼んだ低弦に始まるフガートの「トリオ」です。スケルツォに戻ると楽器も替わり、終始弱音で進められ、静寂の長い経過部からクレッシェンドすると切れ目なしに第4楽章に突入します。

### 第4楽章 Allegro - Presto ハ長調 4/4 拍子 ソナタ形式

童謡「かもめの水兵さん」を思わせるファンファーレで始まります。旋律の裏で、腱鞘炎の危険を顧みず「地獄の刻み」を続けるヴィオラ(4小節目からは 2nd ヴァイオリン)にも注目してください。第2主題は「運命のモチーフ」の変型でできています。展開部後半に第3楽章を回想して再現部に突入します。



## 【第88回メンバー】

第1 ヴァイオリン	佐藤克哉、三瓶政一、☆時山響子、西川富之、西村 実、本山まり子
第2 ヴァイオリン	相羽あゆみ、石嶺寿子、佐野敦子、関根佳子、宮本敦、森未知
ヴィオラ	柴野かおり、下山純也、♪関口孝司郎、千秋和久、山口 彰
チェロ	緒方 淳、工内智恵、寺山知宏、野村真優子、♪三次摂子
コントラバス	江川博之、♪須賀敬亮

フルート	上野京子、久慈弥重子、徳植俊之
オーボエ	市川亜理、山口高司
クラリネット	鈴木千暁、中嶋智子
ファゴット	越島康太郎、星野未央、山田高盟
ホルン	尾形武一、町田明子
トランペット	鴨狩公一、菌部晴信
トロンボーン	鴨川友輔、桜田健彦、鶴間紀子
ティンパニ	星野武徳

☆:コンサートマスター、♪:弦楽トップ

練習指揮	山上孝秋
トレーナー	戸澤哲夫(東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター)



### ♪ 次回の演奏会ご案内 ♪

日時: 2021年9月18日(土) 14:00 開演予定  
場所: タワーホール船堀 大ホール  
指揮: 平川 範幸  
曲目: 未定



詳細は HP <http://www.e-dimanche.jp/> をご覧ください。

# L'INGANNO FELICE

*Sinfonia*



## 本日のアンコールについて（予告）

本日のアンコールは、

**ロッシーニ：歌劇「幸福な錯覚（幸せな間違い）」序曲**

（の予定）です。

本演奏会プログラムの曲目紹介「シューベルト：交響曲第3番」にあるとおり、シューベルトが交響曲第3番の作曲に当たって影響を受けたと思われる曲です。

この歌劇は、現在ではほとんど公演されることはありませんが、1812年にヴェネチアで初演されて以来、イタリア各地のほか外国でも公演されるほど、当時は人気が高かった曲です。1816年にはウィーンでロッシーニの歌劇が初めて公演されますが、その時の演目であり、ウィーンにおけるロッシーニ・ブームの火付け役ともなっています。

特に交響曲の第1楽章第2主題がこの序曲の第2主題によく似ていますが、これはあくまで筆者の感想であり、文献等から得た情報ではありません。そこで今回、皆様に聴き比べていただきたく、アンコールに選びました。なお、本日は、トランペットとティンパニを加えた編曲版で演奏します。



**Franz Schubert**

**Rossini さん LOVE !**

アンサンブル ディマンシュ第88回演奏会（2021.02.21）に寄せて

文責：ウーロージ・カーター